

野田中学校には、20代の教員が4人いる。それぞれ、どんな思いを抱いて働いているのだろうか。昔と比べると、若者が何だか伸び伸びしていないようにも見える。それがいいかどうかは分析の余地がある。

自分の20代を振り返ってみる。小学校1校と中学校1校に勤務した。いいかわるいは別にして、今よりも伸び伸びしていたように思う。先輩教員や管理職、保護者、地域社会などに、それを許してくれる雰囲気、度量があったのではなかろうか。

そう考えると、今の若者が伸び伸びできないとしたら、まわりがわるいのだろうか。そもそも、もっと伸び伸びしたいと思っているのかどうかという問題がある。こちらが勝手に心配しているだけで、本人たちは意外と現状でよいと考えているかもしれない。

気になることがある。それは、若者のもっている力を最大限に引き出しているのかという点である。本当は、もっとできるのではないか。もっとやりたいことがあるのではないか。まわりに合わせて縮こまってははいないだろうか。窮屈な思いをしてはいないだろうか。

あくまでも、自分が若い頃と比べての話である。若い20代にとっては、今の状態が普通なのであろう。比較の対象がないわけなのだから。小さくこじんまりとまとまってしまうことはないだろうか。ミスや失敗を許してはくれない雰囲気になってはいないだろうか。

教員の場合、仕事の相手が、まだまだ未熟だが、将来性豊かであり、未来を任せるべき人材である子どもたちである。だから、ミスや失敗は許されないという面はある。だが、後で思い返すと、昔はミスや失敗を重ねていたように思えてくる。ただし、こうしたい、こうなってほしいという熱いものはあった。きっと、未熟な若者を、先輩や管理職、保護者が温かく見守ってくれていたのである。みんなに育てていただいた。そう思っている。今思うと、保護者はどう思っていたのだろうか。危なっかしい先生だと見ていたのだろうか。

そのうち、20代の4人に、いろいろなことを聞いてみたい。野田中学校の場合だが、4人それぞれに教育係を任命してある。今風にいえばメンターだろうか。教育係を中心として、所属学年で若手を見守り育てようという雰囲気がある。中には、共に成長しようとしている先輩教員もいる。そんな先輩たちを若手はどう思っているのだろうか。どんなことを学んでいるのだろうか。

私が初任のときの小学校の先生方は、ちゃんとしていた。このレベルの高い環境で、自分はやっつけていけるのだろうかという不安を抱いた記憶がある。学年主任であり、研修主任でもあった先生が、自分の目前で話している。にもかかわらず、その中身についていけず眠くなってしまった。そんな人間が、今は、4人の20代教員の行く末を案じているのだから不思議である。長い人生の中で、20代ほど大事な輝ける年代はない。いつまでも、4人の成長と活躍を願っている。